

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功 の



美術の時間
を
楽しむ
ための
ヒント

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その100 「受贈記念 泉茂の版画」展

1000回目

この「美術をたのしむ、美術館をたのしむ」もお陰さまで一〇〇〇回目を迎えることができました。八年半ほど前に始まった連載ですが、どのようなことでも続けられるのはそれだけで幸せなのだと感じています。

実は小学生向けの鑑賞の催し「こども鑑賞クラブ」も先月、「一〇〇〇回記念・デザイン」の巻を行いました。「クラブ」は二〇〇四年六月以来、展覧会ごとに開催し、美術が好きな子どもたちの集まる場として定着しています。記念として、毎回どのような活動をしたのか、当館ツイッターで一〇〇日間・一〇〇回に分けて紹介することもできました（執筆・竹内利夫上席学芸員）。開館時に発行がはじまった当館の美術館ニュースも今年度中に一〇〇号を発行する予定です。

スタートの時期は異なりますが、それぞれ一〇〇回という区切りを迎えて、ささやかながらも歩んできた歴史を思い起こさせる機会となっています。

どのような画家だったのか

さて今回は、開催中の展覧会「受贈記念 泉茂の版画」（十月十六日まで・担当・吉川神津夫上席学芸員）に触れておきたいと思

います。

泉茂（一九二二—一九五五年）は大阪で生まれ、戦後の現代美術をリードした作家の一人として知られています。昨年度ご遺族から七五点の版画作品が寄贈され、これまで収蔵していた作品と合わせると、コレクションで彼の版画制作の流れを概観できる展覧会ができるようになったのです。

本展では、泉の版画表現の変遷を吉川学芸員が解説したパンフレットも用意していますのでご参照ください。ここではそれと重ならないよう、泉の作家としての生き方に注目してみたいと思います。

泉茂はどのような画家だったのでしょうか？ 誰しも自身の能力と個性を活かし切るのには簡単ではありませんが、彼は戦時中からそれを一貫して求めた人だったようです。ただし求道者的ではなく、どこか関西風にゆったりと大局を見ているような大らかさがあったように思います。何度か会ったことがあるだけで偉そうなことは言えませんが私にはそのような印象が残っています。

二十歳前後のとき泉は、大戦中の非常時にもかかわらず「絵描きになりたい、画家になりたい」という強い気持があったそうです。当時そんな人がいたのかと驚

くほどですが、須田剋太（司馬遼太郎『街道をゆく』の挿絵でも知られる画家）のような「戦争画を描かない絵描きさんたち」と雑魚寝をしながら、奈良のあちこちへ絵を描きに行っていたといえます。「非常にのんびりと絵を描くグループの中で心ゆくまで絵を描けました」というのです。

戦後、軍隊から帰ってきた面壇の画家たちと交流するようになったときは、「誰かの弟子になるのは嫌だな」と思ったそうです。そのとき出会ったのが、ちよつと年上の「ならず者みたいな絵描きさん」瑛九でした。

彼は瑛九について、「一つの生き様として作家的な深さと言うんですか、自分のやりたいことに対する食欲さをあらわに僕らに感じさせる人でしたな」と述べています。全国的な展覧会で「ぼろくそに言われる」ような絵も、瑛九は「泉さん、これいいよ。これ以上大変な絵を描いたらいかん。これが、一番いいよ」と言葉をかけてくれたそうです。「率直さがいいんですよ。このナイーブさがいいんですよ」「君の素直さを失ったら駄目ですよ」と励ましたくれました。

泉は、その瑛九を中心とする「デモクラート」の結成に参加し、活躍していき

ます。池田満寿夫、靨嘔、河原温、写真家の奈良原一高、岩宮武二らを輩出したグループです。

泉は、「デモクラート」解散のきっかけもつくっています。第一回東京国際版画ビエンナーレ展（一九五七年）で泉が受賞したことで、瑛九は、グループのなかから賞をもらおうような「偉い人間が出てきたら、もうこの会は墮落してしまつたから解散だ」と宣言したのでした。今の感覚からすると乱暴な感じがしますが、そのように言われた人に割り切れなさが残るかも知れません。しかし泉は、「なかなかの見通し」があったと振り返っています。グループを長く続けていくと、作家のなかの上下関係や表現の型ができ、一人一人のもつよさが見えなくなっていくからです。

泉は、「デモクラート」を「一人の作家を育てるといふか、作家とは何か」ということを感じさせる濃度は非常に強いグループだったんじゃないでしょうか」と語っています。「皆それぞれ二〇代、三〇代までになりそれぞれ猛烈に切磋琢磨したんでしょうけれども時代が時代ですから、そんなに苦労したとは思ってません」といったことも述べています。

それは終戦から十数年間に

起こった出来事です。瑛九が泉の作品を最初に褒めてくれたのも、泉の「狭苦しい家」でした。復興期が彼らの活動の時代背景だったのです。第二次世界大戦後の日本は、新しい美術のしくみをつくる可能性のある時代でしたので、志のある青年たちは、苦勞を苦勞と思わず「猛烈に切磋琢磨」することができたのでしよう。

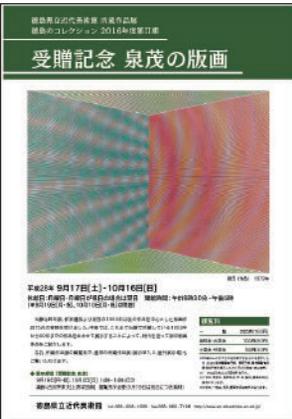
*本稿での引用は、『泉茂 自著述集』一九九六年 番画廊。

挑戦し続ける

泉茂が残した文章を読んでいると、型にはまらず創造的に仕事をしようとする熱意が伝わってきます。一九五五年のエッセイでは、「ぼくの周囲の現状は他人の借色で一パイだ」と書いています。「他人の借色」とは、どこかで見たような色使いをしていて、色彩が溢れているけど「色の使命がどこかに置き忘れ」られた状況を指しています。そのように感じた頃、泉は銅



泉茂〈深夜のセロ弾き〉1954年



「泉茂の版画」展ポスター

版面に惹かれていったようなのです。しかも、「油絵専門家、水彩専門家または銅版師、木版師といった呼称の下でしか生活でき難いこの日本の悪習を一日も早く切り崩すこともぼくらの若い作家のなすべき仕事」だと述べています。ピカソやレジェ、ミロなど、西洋の作家は、油絵も描くし版画や陶芸、彫刻もやって、それぞれ自由で面白い仕事をしているのに、日本ではどうしても枠をはめられてしまう。油絵を描いていた泉が、

独学で版画に挑戦したのは、枠にしばられずに表現を展開したいという思いもあったからなのでしょう。試みたのは銅版画からリトグラフ(石版画)、シルクスクリーンへと広がります。そのことは、展示室で作品を見ていくとよく分かります。初期の版画は、たとえば楽器が人間や鳥になり、蝶のようなリボンがあったりトランプの重なりが人の姿になったりする、詩的でど

こかセンチメンタルな味わいのある表現です。それらは、「あくまで自分の生活を基盤としたところ」からモチーフをとったもので、そこから離れるとよそよそしくなってしまうと述べています。しかしそのような版画が人気となり、売れたことに危機感を感じたのも泉らしいところでは、彼は、「こんなもの売ってて、食って行けるいうて喜んでたら、俺はもうしやあないんじゃないかと」考え、渡米を決意します。自身の表現に造形性を強めようとする問題意識もあって、自己改革のための新天地を目指したのです。そしてフランスへ渡った時期を含め、およそ八年半、アメリカとヨーロッパで活躍し、一九六八年に帰国します。

若い世代への励まし
私が晩年の作家と会ったのは、今は無い大阪の番画廊でした。学芸員となって初めて会う機会だったので、画廊の松原光江さん(故人)に促されて名刺を差し出したのですが、名乗っただけで帰ってきてしまいました。隣にいた松原さんが少し目を丸くして呆れた顔をしていたのを覚えています。その前にお会いしてから十年くらい開いており、私淑するようにして遠くから作品を見ていただけだったので、若い私は自分を説明するのに気が引けてしまっ

たものなど常に表現を変化させ、自分の殻を破り前進しようとしていた姿がうかがえます。ただし、最後の雲形定規のシリーズは、アルミホイールや定規、コンパスを用いた作品にはない叙情性が感じられます。本展。パンフレットで吉川学芸員も触れているように、「過去に回帰するきっかけ」になった表現だったのかも知れませんが、雲形定規の湾曲した線の重なりを見た人からは、「動物や人に見える」という意見が出てきます。初期の作品で楽器と人が重なっていたように、抽象的な形と人や動物など、多様なイメージが重なって感じられるのです。

- 10月の催し
 - 特別展「日本・ベルギー友好150周年 ベルギー近代美術の精華展」
26日「水」から
 - 所蔵作品展「受贈記念 泉茂の絵画」
16日「日」まで
 - ・展示解説 2日「日」 講師：吉川神津夫「上席学芸員」
 - ・子ども鑑賞クラブ「旅芸人の巻」15日「土」
 - 所蔵作品展「特集1 立つこと、座すこと、歩むこと」
10日「月・祝」まで
 - 所蔵作品展「特集2 戦後日本画の人間表現」
12日「水」から
 - ・テーマで知る名品 30日「日」 講師：森芳功「企画交流室長」
 - ※今月の講座はすべて14時〜14時45分